

オープン学習会「色覚多様性と人権教育」2025年2月8日感想

○わたしは中学校で勤務している養護教諭です。約5ヶ月後、例年どおりなら約100人の生徒たちに色覚検査を実施します。このままでよいのか配慮など足りないところはないかと頭をよぎりました。途中からの受講ですが、情報の真偽をみきわめることなど考えさせられることが多く、もっと知りたい、そう思いました。色覚多様性のテーマからは外れますが、心身の疾患や障害が生活や人間関係におけるマイナス要因や差別を招くこと、それにどう向き合うかをじっくり考えていきたいと思えます。

○今年度も中1に希望制で実施しました。いままでは自分の特性をしるためには必要だと思っていましたが、そんないいかげんな始まりであったことに驚きました。しかも明治時代に造られた検査表を今も使っているとは！徴兵制に向かうなかでは、見え方に多様性があると何か困ることがあったのかと考えました。いま、教師のささいな一言が生徒を傷つけてしまい、学校にこられない状況にさせてしまいました。色覚のことで同じことがおこらないように職員間できちんと共有します。

○今日は本当にありがとうございました。前半で実際に色を見て見え方が違うことがよくわかりました。学者のいうこと、論文も簡単に信じてはならない、自分に都合よく事実も捻じ曲げる人たちがいるというのが悲しいです。色覚少数者の割合が集団(国)によって異なるというのも、その集団の生活(文化)に起因するのかもしれない。日本人の農業の能力が高いことも関係あるのか?と思いました。

○自身の勉強不足、無関心さを痛感させられた学習会でした。出典や根拠が不明瞭な事例が100年あまり経った現在にも残っており、それをもとに排除・選別を行うことの恐ろしさを感じた。ここへ来る前に軽く色覚についてネットで調べていても今回取り上げていた間違った事例をもとに色覚少数者を排除する言説を見かけた。それがどのように広がっていったかがとてもわかりやすく説明されていてよかった。ありがとうございました。

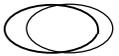
○教職員が色覚多様性についての理解を深め、それを保護者や地域に啓発していくことが大切だと思いました。同時に、子どもたちに社会モデルの考え方、バリアフリー、ユニバーサルデザインを重視して関わることもあらためて大切だと思いました。

○色覚検査がなされていた歴史をうかがい感じたのはハンセン病に関する差別の歴史と重なるということでした。人によって見え方は異なる、見え方は脳で判別している。見え方の異なる人が集まっていることは多様なものの見方をする人がいるということであり、組織や社会にとってプラスであるということ学びました。公文の誤りの話も伺い、新聞や週刊誌など書かれたものが本当に正しいのかどうか見極める力を常に持ち続けたいといけないう気持ちになりました。

○尾家さんのお話は以前に聞いたことがありました。そのとき一番学んだのは、現在の差別的な構造は、富国強兵と言い出した明治維新後にあり、ハンセン病の隔離政策における動きと重なっている。排除・差別の構造はこんなふうによつてつくられたということでした。とてもわかりやすく示していただき、ハッとしました。今日のお話は、それを超えていかに権力を持つ人たちの都合の良いように事実がつくられ、振り回されているのかがわかりました。これでもかというぐらい、事実はなにかを調べ、示されていることが本当に必要だと思いました。そして5W1Hの重要さがわかりました。色覚検査が再開したということが恐ろしく感じました。決まったことだからと知ることも、考えることもなく取り組まれていくのか…その犠牲は子どもたちと思うとやりきれません。学校教員ではないけれど、この検査のおかしさなどは学校以外のところでも伝えていけると思うので機会をつくって伝えていきたいです。また、色覚多様性という意味についてわかっているつもりでわかっていたことに気づけたのが嬉しかったです。

○色覚多様性についての知識が少ないからだと思いますが、いま混乱しています。色覚検査が復活し、救われる子どもたちがたくさんいるのだらうと思っていたのですが、それだけではない。クラスに検査を受けて少数色覚者であることがわかった子がいて、保護者は「特に何も困っていないようです」とのこと。赤の代わりに蛍光オレンジのチョークを使うようにしましたが、他の子たちにも見えやすいと好評です。つくられた差別は、たくさんあって、何も是正されていないことに驚きました。「根拠ない」ということを証明した尾家さんのお話に感銘を受けました。

○色覚について知らなかったことがたくさんありました。文献に載っているからそれを事実として受け入れることがいかに誤解と偏見を生むかということもいくつも例をあげてもらって実感を得ることができました。ありがとうございました。

○色覚によって集団で生き延びやすくなるということになるほどと思いました。また、色覚多様背については、 この図がとてもわかりやすく自分のなかでそういうことか!とふに落ちました。人は違って 当たり前という部分に色覚についても意識がなかったなと思いました。何のため、本当はどうなのか、確かめるということしっかり確認していきたいと思いました。

○その子どもが自分の色覚のありようを知るというのは、とても意味のあることなのだが、排除を目的とした優生思想を背景にした”検査”は人間の個性に優劣をつけるだけのものでしかない。いいところ探しにもつながる”優れたものさし”によって他者からの評価で自分の値打ちを実感できない子どもが日々量産されていることを思うと明治の優生思想は脈々と継承されていると思わざるをえない。

○色盲という言葉は今も耳にすることがあり、昔に教育を受けた人はほとんど誤解を持ったままだと実際に知っている。でも、根拠なく造られた「異常」で人を排除されてきたことはもっと知られるべき。身近に感じていなかったことだが、学んでみると正しい知識を知るべきだと改めて思った。識字教室に持ち帰りたい。

○色覚多様性について初めて詳しく学ぶ機会になりました。現任校にも対象の生徒がおり、看護師を志望しています。最近進路指導室で”色が識別できなかつたらなるのは難しい”と指摘されている教員の発言に違和感を感じて本日参加させていただいた次第です。教員の知識が圧倒的に足りていない。生徒の不利益にならないよう、本日の内容はすぐに周知します。中・高生向けの冊子も学級用に購入します。ありがとうございました！

○色覚検査だけで、受験資格がなくなるというのは確かにおかしいと思う。一方、等高線(地理)の学習時にその違いがわからず、本人が誰にも言えず、苦しんだという例も聞いた。いろんな見え方があるということを体感する学習は絶対必要だと再確認できた。